四天王寺悲田院養護老人ホーム

悲田院養護老人ホームは、年々養護老人ホームへの「措置」は減少している。その厳しい状況の中でも、今後多くの高齢者に利用して頂く為には、社会で求められているニーズや、介護、認知症についての専門性をスタッフ個々が高めることで「私たちにできる事」を明確にし行政にも発信していくことが必要である。またコロナ禍の中でも安心・安全な生活を提供しつつ、ご利用者に毎日、何らかの「楽しみ」「やりがい」を持って頂けるような生活を支援できる施設を目指す。

～具体的な事業活動～

(1) 具体的なご利用者支援、スタッフのスキルの向上

個別支援計画の内容をスタッフ一人ひとりが理解した上で、ご利用者に対するニーズを具体的に把握し、計画的に目標を持って支援できるようにする。従来の研修にとらわれずに、リモートを活用した外部研修の活用、研修受講者による他スタッフへの伝達研修を行うことで、知識、技術の向上、全体的なスキルアップを行えるようにする。

(2) 行政との関係作りの強化、新たなネットワークの構築

既存の行政機関だけでなく、新たな地域や救護施設との連携、関係作りを行う。コロナ禍で訪問が困難になることを想定した上で、悲田院養護の強味、特徴を発信する方法を確立し、依頼のある相談ケースに対して迅速に、誠意をもって対応することで気軽に相談してもらえるような関係作りを行う。

(3) ご利用者に「楽しみ」を通してメリハリのある生活を提供する

従来の、施設が主に提供している大きな行事だけでなく、ご利用者が毎日の生活の中から「やりがい」を感じることができるようなレクリエーションの提供や、犬やその他動物達を通して、ご利用者が主体として楽しむことができる機会の提供を行う。また余裕をもった計画作成を行い、コロナ禍でも可能な限りご利用者に「楽しみ」を提供できるようにする。

～改善活動～

(1) 分析をもとにした転倒への取り組み

令和3年度の転倒分析データに基づき、リスクを予見した転倒対策を立てることができるようになる。また、福祉用具の活用、筋力の強化を器具や体操を通して行う。令和3年度一部で取り組んできた、足サイズの計測による本人あった靴の購入を、令和4年度は施設全体で取り入れ、転倒防止に力を入れる。

(2) 働きがいのある環境、協力しあえる環境への検討

令和3年度から4年度にかけて、外国人のスタッフも加わり、多国籍のスタッフがご利用者のケアを考え支援する環境となってきた。スタッフ一人ひとりが職場への愛着をもち、離職を減らすことができるよう、ご利用者だけでなく、スタッフ間でもお互いに尊敬しあえる関係作り、協力しあえる環境づくりを実践する。